

おひさま通信

コロナ禍での
仲間の給料保障の
とりくみと日々の活動

* 蓮田はすの実作業所 *

蓮田はすの実作業所には、23人の仲間が通っています。和香（わこう）班と相楽（そう）班の2つの班に分かれて、それぞれが仕事をしています。

仲間たちの給料を守るために

和香班は、昨年度までは牛乳パックを使った紙漉きではがき作りが主な仕事でした。しかし今年度に入り、新型コロナウイルス感染症の影響で、仕事を大きく変更しなくてはならなくなりました。

紙漉きの仕事は工程の中で、隣り合わせになったり、直接手添えをして支援するということもあり、いわゆる「密」の状態になってしまいがちです。向かい合わせで立っている仕事机には、中央に水をためるコンテナがあるため、パーティションなどが設置できない状況もあります。

また、定期的な販売先であった蓮田市内の絵手紙教室も、コロナ禍により開催できていないなどの影響がありました。

紙漉きの仕事をこのまま継続するよりも、新しい日常のソーシャルディスタンスが保て、かつ、これまで仲間が紙漉き仕事で経験してきたことを活かせる仕事はないかと検討をしました。

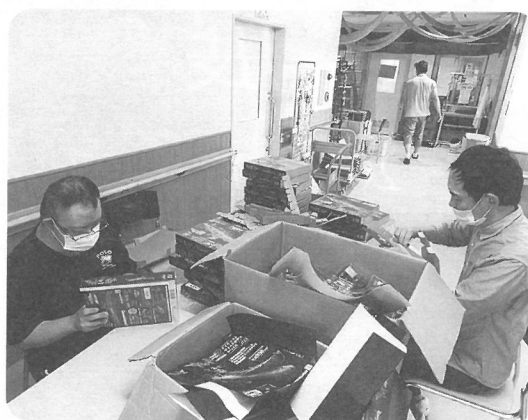
今までは一部屋で活動をしていましたが、人数的に「密」になってしまったため、別々の場所2ヶ所での取り組みとなりました。その中で、白岡太陽の家にじが行っている手帳やカレンダーの解体、分別（紙やビニール、金具などの資源別に仕分ける）の仕事に取り組んでみることにしました。

下請け仕事では納期や仕事効率、精度などが求められます。しかしこの仕事には納期はなく、できあがったら納品し、最終形態こそあるが途中過程での形態は問われないなど、仲間の得意なことが活かせる仕事でこれまでのイメージとは違っていました。

いざ、仕事を始めてみると、仲間が力一杯に勢いよくビニールを破いたり、どこから破くのか持ち手を変えて探したり、小さく紙をちぎったり、一人で黙々と取り組んでいたたりしま

した。それぞれが思い思いのやり方で苦戦しながらも、紙漉きとは違った仲間の一面を垣間見ることができました。またおおよその時間で仕事を区切ることもありましたが、この仕事では分量で終わりが分かるため仲間もさらに見通しが持ちやすくなりました。

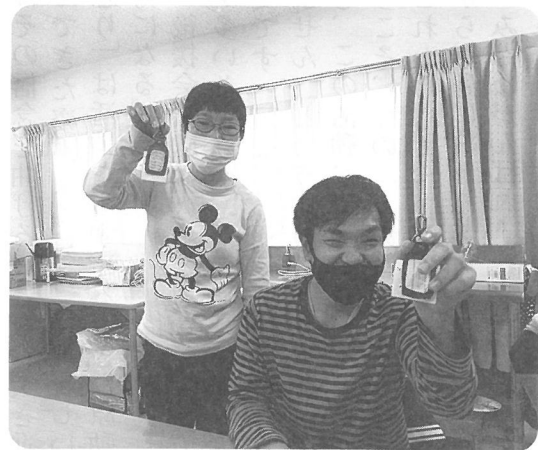
しかしながら、仲間からは「紙漉き」や「ミキサー」などの声も挙がっています。また絵手紙教室なども再開し始めているようです。これまで取り組んできたものと新たな形として紙漉き用にミキサーで攪拌した、いわゆるパルプを使った表現活動や創作活動など、「紙漉きイコールはがき作り」だけではない新たな取り組みとしての紙漉きをこれからも仲間と一緒に模索していきます。



作業所全体で協力

相楽班は、企業からの下請けとクッキーなどの食品製造、織りやフェルトのマスコットづくり、その他いろいろな小物づくりを仕事にしています。食品は自治会で行うサロン（地域の集いの場）やお祭り、作品展等で販売していました。また、その他の授産製品も同様に販売し、販売活動を楽しくにしている仲間も多くなります。

しかし、今年度は新型コロナウイルスの影響で、イベントなどでの販売がなくなってしまうと。仲間の給料を保障するために、これまでやっていた下請け作業（ポルト組み立て・シャープペンやボールペン組み立て）に力を入れました。下請け作業は、



ちが安心して、安全に通えるように職員も緊張感を持った日々となっています。

作業所内では7月から『新しい日常』をスタートさせました。全員食堂で食べていた昼食を、作業室を使用して、仲間・職員合わせて一部屋10人程度での食事に変更しました。

また一部屋にみんなで集まる全体会（自治活動）も、パソコンを利用して二部屋に分けてリモート全体会にしたり、10月から再開した読み聞かせボランティアでも2部構成にしたり、感染対策をしながら、出来るさまざまなツールを使って、これまで行ってきた活動の保障もしていきたいと工夫しています。

毎月行っていた土曜活動日は、地域のイベントや作品展見学、運動を兼ねた小外出をするなど、楽しい時間となっていました。これも多くのイベントの中止や外出先での感染の恐れを考慮して、9月まで実施しませんでした。10月から再開し、（当初は運動を予定していましたが）天候不良のため室内で換気をしながらキーホルダー作りをしました。そのあとお弁当を買いに行き、食堂で距離を取って食べました。これまでの土曜活動と比較すると、少し小規模かもしれませんが、参加した仲間たちに楽しい時間となりました。

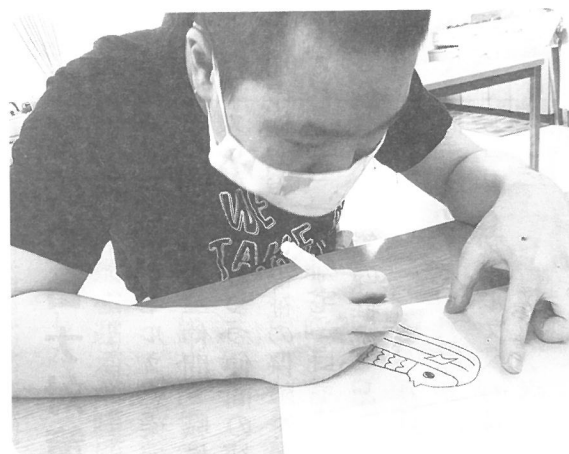


作業所内の活動が『新しい日常』となっていますが、何より仲間たちがその変化を受け入れ、対応し、作業や活動に変わらず取り組んでいる姿に、頼もしさを感じています。

しかしこの夏は、給料の確保が一杯の状況でした。仲間「ボナスは？」と言われましたが、残念ながら支給することができませんでした。仕事が動き始めてきているので、今後のボナナスに向けて、はすの実一丸となって取り組んでいきます。

これから寒くなり、引き続きの感染対策をしていかななくてはなりません。仲間・職員だけではなく、家族や地域とともに、このコロナ禍を乗り越えていきたいと思います。

蓮田はすの実作業所 竹田 正冬



どれも流れ作業で行うため、1つの机で5〜6人ずつで仕事をしていきます。しかし、相手との距離が近すぎて「密」になるため、部屋を二つに分け、工程ごとのテーブルを作り、少人数体制に変更しました。また少しでも給料にの思いで、和香班で取り組み始めている解体作業を協力して行い始めました。仲間たちには新しい仕事でしたが、すぐに解体・分別できるようにになり、班という枠を超え、はすの実作業所として一体的な作業となりました。

また頼りにされていることをうれしく感じています。下請け作業が増えたことで、忙しくなっていました。面もありですが、時間をみつめて、コーヒーを飲んだり、DVDを見たりしています。

はすの実の『新しい日常』

コロナは、仕事場面だけではなくいろいろな活動にも変化をもたらしました。

今年3月に予定していた日帰り旅行は延期となり、毎年6月に開催している作品展や今年の一泊旅行も未定となっています。また感染対策として自宅待機の要請やマスクの着用、の推進、アルコールによる手指消毒に毎日の所内消毒作業など、仲間た